

今月の投稿で、藤色さんの「雨の日の唐揚げのじゅわ」、鯨井鴉舅さんの「馬鹿だって悲しい。」が心に残りました。言葉があるゆえに私たちの心は難しく繊細にあります。だからこそ詩は生まれますが、シンプルな想いに出逢うときの洗われるような心地良さも大切にしていきたいものです。

●対称に描かれて林檎の憂鬱

合川秋穂 京都府

⇒デッサンに慣れないと対象そのものを描けず、脳内で補正してしまうことはままある。自身より大きな存在に、本来の形を曲げて存在し直させられる。それはこの林檎だけではなく、我々にも当てはまる。他者にそのままを受け取ってもらうことの難しさを思う。漢字とひらがなのバランスもシンメトリーを感じられて良い。

●ひび割れた

硝子の皿を手に

見てた

遊覧船が 裂いていく川

まちりこ 埼玉県

⇒手の中の世界と、自分の外の世界が裂けている感覚。「硝子」の漢字表記の透明感が「川」と響き合い、内と外の感覚が繋がって曖昧になってゆくのがうまく出ている。「見てた」の傍観者的な立ち位置に世界へ馴染めない心許なさが滲む。巨大な遊覧船は主体の心にも入り込みゆっくりと裂いていく。

●父親が

高野豆腐を

日没のように食べてて

雨に似る箸

折田 日々希 神奈川県

⇒「日没」、一日の中で最も激しく燃えるような色で、そのくせ静かに沈んでいく太陽。そのように食べる姿とはどんな様子なのだろう。激情と静けさを内包した表情で、箸だけが動き続ける。父親の中の大きな気配に慄く。日常の中に詩を溶け込ませるのは難しいが、情緒豊かに描き上げた。

● ホッチキスでせきとめて

からだじゅう、

針が飛び出て愛はぼたぼた

藤ほたる 神奈川県

⇒この作者はオノマトペが巧い。今月の投稿作品に「ほううほううと麒麟の足音」「ばりばりと景色の表は剥がされて」「ぢぢぢぢやけどでしんだ人」と、この作者しか聴き取れなかつたろう音が生き生きと続く。掲出作品は「からだ」と「ホッチキス」の痛々しさ、漏れ出てしまう「愛」の哀しさを描く。からだも心も傷ついて「ぼたぼた」と愛も血液も零れ出る。

● アルペジオ類が何かで濡れている

白野 新潟県

⇒涙なのだろうなと思うが、違うかもしれない。悲しみのせいかもしれないが、喜びかもしれない。「アルペジオ」を初句に置いたことで分散和音の響きが作品の世界に光のように降り注ぐ。何を見たのか、感じたのか描かないことで美しさのみが際立つ。

● 一行目を

書く手はいつも

震えるけど

それでさびしい

文字をおぼえる

翠 東京都

⇒私だけが書いた文字、あなただけが書いた文字がある。文字は文字でしかないが、書いたときの想いが色をつけていく。3行目までは甘さが目立つが「それで」の繋ぎ方が良く、「さびしい文字をおぼえる」ことは本人にしか納得し得ない対価なのだ。

● 猛烈な速さで

たった一度きりの命を失いながら

ファミチキ

鍋島小骨 北海道

⇒生きることは死んでゆくことで、作者はそれをよく分かっている。「失いながらファミチキ」という極端な省略がファミチキに没頭しそれ以外は見えていないのが伝わる。失う

だけではない生命の点滅が感じられる。雑然と命が溢れ消費されていく中、ぼつつと「今」に熱中している存在感。

●人生は全員の中にあるらしい

キモいけど歴史それでも歴史

小林奔 神奈川県

⇒「人の数だけ人生はある」とは言うが、そこで思い浮かべるのはそんなに多くない。括弧を歴史にするだけで、数えきれないほどの人生が見えないだけでこの地に犇めいているのが感じられて確かに「キモい」。その視野の広さと若者言葉の取り合わせが良い。

●ひらがなになってゆく

波寄せるたび

細村 星一郎 東京都

⇒海を前にしたとき、言葉は必要ではなくなる。「波寄せるたび」という表現に、硬くて張りつめた状態だったのが少しずつほどかれているのが分かる。作品の中で「波寄」のみが漢字になっているのも、その瞬間だけ意識がふと戻るようである。シンプルゆえに美しさが際立つ。

●生き物は目玉をべこりへこませて

おんなじ顔で宇宙へと去る

うずたろう 埼玉県

⇒「目玉をべこり」「おんなじ顔」と容赦のなさが良い。死んだあとの無への恐怖を丹念すぎるほど丹念に描いた。私たちの魂は瞳にあった。死後、中身を失った器は天へ召されるのではなく宇宙を彷徨う何かになる。実際に死後の世界を見たのだろうかと思うようなリアリティがあるが、本当にこんな世界だったら怖い。